



PCCH-00024

東京宝塚歌劇団 特別公演 実況録音

屋根の上のヴァイオリン弾き



Fiddler on the Roof



東宝ミュージカル特別公演 実況録音

屋根の上のヴァイオリン弾き

ショラム・アレイハムの小説による(2幕18場)

台本：ジョセフ・スタイン

音楽：ジェリー・ボック

作詞：シェルドン・ハーニック



TOHO CL., Present

Fiddler on the Roof

BASED ON SHOLOM ALEICHEM'S STORIES

Book by JOSEPH STEIN

Music by JERRY BOCK

Lyrics by SHELDON HARNICK

屋根の上のヴァイオリン弾き

第1幕より

1
しきたり
伝統のうた
(TRADITION)

2
すてきな人をみつけてね
(MATCHMAKER, MATCHMAKER)

3
金持なら
(IF I WERE A RICH MAN)

4
安息日の祈り
(SABBATH PRAYER)

5
人生に乾杯
(TO LIFE)

6
奇蹟の中の奇蹟
(MIRACLE OF MIRACLES)

7
陽は昇り又沈む
(SUNRISE SUNSET)

8
ビンの踊り
(BOTTLE DANCE)

9
結婚式の踊り
(WEDDING DANCE)

屋根の上のヴァイオリン弾き

第2幕より

1
すべてが今はこの手に
(NOW I HAVE EVERYTHING)

2
愛してるかい
(DO YOU LOVE ME?)

3
ゴシップ
(I JUST HEARD)

4
愛する我が家をはなれて
(FAR FROM THE HOME I LOVE)

5
チャヴァよ
(CHAVA)

6
アナテフカ
(ANATEVKA)

7
マーチ
(MARCH)

8
フィナーレ
(FINALE)

9
陽は昇り又沈む
(SUNRISE SUNSET)

中日劇場にて収録



Fiddler on the Roof



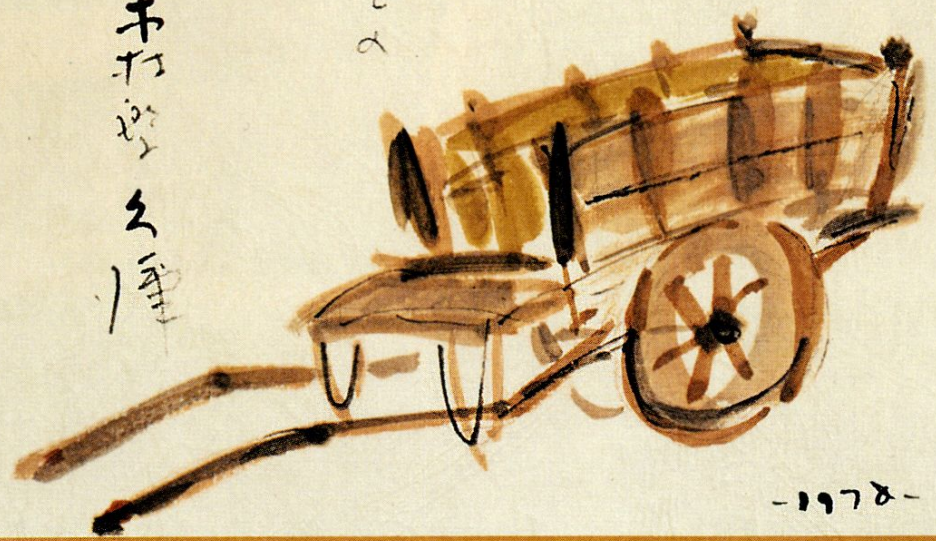
そのと設御とてまり
 また旅人と流さ小て
 さたまるどころと
 知らぬニクヤの氏
 テグエが怪しな木
 アナコッ刀村とあてたのは
 幸い少島の落る時
 かつた遠く大とカラス
 はり（あ）とあとも同か、なつら



HISAYA.

1982.

テグエは
 あろかに
 まゝ
 ニハ
 ラグエとせよ
 親たち



おれは

-1978-

この物語りは、日本流でいうなら明治40年、つまり日露戦争後のロシア。漸く革命のキザシに国内騒然たる一ロシア帝国崩壊の前夜ともいう時代のお話である。

ロシアの三大都市の一つといわれるキエフに近い、小さな村—それは架空のアナテフカが舞台である。

国無き民といわれたユダヤ人たちが、この村に肩をすぼめながらも、楽しく生きていた—そんなところから始まる。

彼らは、伝統として受けついで来た古いシキタリ (TRADITION) を重んじ、ユダヤのきびしい戒律の中でバランスをとって来た。

これが幕開きの迫力にみちたオープニング、即ちプロローグである。

不安定な屋根の上 (異国) で、素朴な調和のとれた音色 (生活) をかきならそうとする、これはなかなかのことだ。しかし、こゝが生れ故郷だから—と説明し、それは私たちの古いシキタリによる—と歌うのである。

そして物語りは、この村に住む陽気で人の

好いテヴィエ (父) の一家の話になる。

貧しいテヴィエは、酪農をやり、村に牛乳やバター、チーズを売って生計をたてているが、半分は働き者の妻ゴールデのおかげである。彼の頭痛の種は、子供五人がすべて娘であることだ。

この頃のユダヤ人のシキタリは、驚くほど日本人の古い習慣に似ている。仲人によって婿嫁がきまること。その日まで二人は顔を見たこともないという。紅いブドー酒を三度ずつのんで、始めて顔をおうレースを取る、日本では綿帽子をとるのだが、その時嫁の顔を見て、これか！と思うのも同じのようだ。

そんなシキタリにも時代の波は強い、若い者たちは、自由を叫び、恋愛を始め両親をおどろかせ悲しませる。

長女は、金持の肉屋の後妻をきらって、貧しいが実直な洋服屋の青年に惚れ、娘に目のない父親は、心にもなく、「いいよ」といったばかりに、女房への**弁明**に困りはて、恐ろしい夢を見た、ツクリ夢に苦勞し、ゴール

デを納得させる。次女は、寄宿した革命家と恋に落ち、シベリヤへ彼のあとを追う。悲しい駅の別れは、ホーデル (次女) の唄う「愛する我が家をはなれて」で紅涙をしほるが、汽車のくるのも待たず、寒々しいベンチ一つの駅を去った父テヴィエは恐らく丘の上から、遠く去る汽車を見て泣いたであろう。

革命の前兆らしい、結婚式の騒乱は、警官たちの怒号で、第一幕を切らすのだが、ここまでの二時間にわたる一幕は、いわば「動」というはげしいテンポで終り、第二幕は前述の駅の別れ、三女の異民族ロシア人との恋愛など、深く民族の問題と、漂泊の民ユダヤの哀感を描いて、「静」の中に観客の心をゆり動かす。

そしていよいよ、永住の地としたアナテフカ村を退去させられる終幕へとなるのだが、車に手荷物をつんで、幼い二人の子供とこの夫婦が、幕開きのヴァイオリンのソロで去るシーンは、私に満洲引き揚げを思い出させて、毎回、切なく涙の頬をつたうのを禁じ得なか

った。

この、ミュージカルで素晴らしいのは、幕が下りたと思うや、陽気な音楽で、全員が踊りながら挨拶するアンコールである。これらはすべて、ブロードウェイと同じ演出による。

幕開きに屋根の上に出てくるフィドラー (ヴァイオリン弾き) は、私の影でもあり、私の心でもある。これは題名の如くフィドラーといっているから、ヴァイオリニストではない。だからそんなフニイキを、映画ではアイザクスタンが上手く弾いているが、老巧森田耕蔵氏が長い間の公演で秀抜な音色を出している。もう一つ、この中にはロシア人とユダヤ人が出るが、着る着物ではっきりと区別されているが音楽では、ロシアメロディーとイスラエルのメロディーでその各々を区別する。これも聞きどころである。

又、随所に、音ではわからないシグサが拍手や、笑いを呼んでいるが、これは御想像にまかせるほかはない。



アナテフカ——ロシアの、忘れられたような寒村に、1905年、帝政の頃、ユダヤ人が平和に暮していた。

貧しいけれど楽天家のテヴィエ、25年つれそっている妻のゴールデと5人の娘たち、おしゃべりでおせっかいで結婚仲介が生きがいのイエンテ、気が弱いが意志は強く、仕立屋なのに貧乏でミシンも買えないモーテル、金持で野心家の肉屋のラザール、皇帝様がいつまでもアナテフカを忘れてくれますように祈っている少し恍惚の司祭様……。みんな善良な、ただのユダヤ人たちが平穏無事に暮していた。何故彼らはこのアナテフカ村から出ていこうとしないのか？ 平和に暮しているけれど、それは決して楽なことじゃない。

今日もテヴィエは荷馬車を引きながら神様とお話する。(これが彼の癖でもあり楽しみでもある)。

『そう、このアナテフカ村では、われらはみんな、屋根の上のヴァイオリン弾きみたいなもんだ。首の骨を折らないように、愉快で

素朴な調べをかき鳴らそうとしている。これはそんな楽なことじゃないですよ。

じゃ、なぜ、そんな危険をおかしてそこにいるかとおっしゃるんですか？ わしらが頑張っているのは、このアナテフカが生まれ故郷だからですよ。どうやってバランスを保っているかって？ それは、まあ一口でいえばだ——伝統、しきたりってやつですよ』。

テヴィエの言う通り、昔ながらの伝統が、人々の生活の基盤だった。父親は父親の役目を果たし、母親は母親の、娘は娘の、息子は息子の役目を果たす。

娘の結婚は仲介役のイエンテおばさんが一手に引き受け、母親たちもイエンテにまかせろ——これがしきたりだ。

或る日テヴィエの長女ツァイテルにイエンテおばさんが結婚話を持って来た。相手は金持の肉屋ラザールだという。テヴィエもゴールデも大賛成で話をきめてしまう。だがツァイテルは仕立屋のモーテルと相思相愛、ツァイテルはテヴィエに肉屋との話はなしにして

モーテルと一緒にさせてくれと泣いて頼む。

「何たることだ！ しきたりを破ろうというのか!!」と一時は怒ったテヴィエだが、愛する娘の幸せを思い、モーテルとの結婚を認めてやる。先にきめてしまった肉屋のラザールの話をご破算にするのに大騒動をやらすのが成功する。

だがその頃からロシア人の迫害が段々ひどくなってくる。ツァイテルとモーテルの結婚式の夜を境に、アナテフカから立ち退けといういやがらせは、ロシア人たちの暴力行使にまでエスカレートしてくる。

テヴィエの娘たちにも変化が起きている。次女のホーデルは、革命家の学生パーチックの後を追ひ、流刑地シベリアへ……。

三女のチャヴァはロシア人のフォードカと恋をしてしまう。これはテヴィエにはどうしても許せないことだった。

『神様、認めますか、二人を？ 信ずることのすべてを否定してもいいのでしょうか？ しかし一方、自分の子をこぼむことができま

しょうか？ だが、どうしてわたしの信仰、わたしの民族にそむくことができますよう？』

チャヴァはかけ落ちした。テヴィエは、チャヴァは死んだのだと自分に言いきかせるのだった。

それから間もなく、ロシアの巡査部長からすべてのユダヤ人は三日以内にアナテフカから立ちのけと命令される。背けば軍隊が乗り込むというのだ。

テヴィエもゴールデも、イエンテもラザールも、すべての村人が、断腸の想いで故郷アナテフカをどんなに愛していたか……どれだけ思い出が残されるのか——我々の生命だったアナテフカ——

人々は家をあとに持てる限りの荷物を持って村から去って行く。

ちりぢりに散って行く。

テヴィエ一家の荷車の後から、屋根の上にあったヴァイオリン弾きが、トボトボとついてゆく。ヴァイオリンの素朴な調べに、ひとびとの離散の悲しみをのせて…… (F)

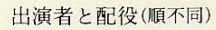




Fiddler on the Roof







協力：(株)出海企画
中日劇場
東宝株式会社演劇部
インターソング株式会社

演奏：東宝オーケストラ

